



Title	プルドンにおける《進歩の弁証法》
Author(s)	黒木, 義典
Citation	大阪外国語大学学報. 1962, 12, p. 1-15
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80204
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

プルドンにおける《進歩の弁証法》

黒 木 義 典

De la dialectique du Progrès chez Proudhon.

par KUROKI Yoshinori

Sommaire

Sujet d'analyse :

- 1) La dialectique sérielle, idée principale dans "La Création de l' Ordre dans l' Humanité".
- 2) Ses connaissances sur la méthode dialectique, surtout de Hegel.
- 3) La composition de "La Philosophie du Progrès", le développement de ses idées entre ces deux oeuvres.

Nous avons d' abord essayé d' analyser son idée principale "la série" et la filiation entre Fourier et Hegel.

Ce mot "série" a presque complètement disparu dans "La philosophie", en même temps que le mot "dialectique", ce qui veut dire que le développement de ses idées se caractérisent surtout par l' abandon ou la négation de Fourier et de Hegel.

Grâce aux Carnets de Proudhon publiés récemment, nous pouvons suivre assez nettement le changement de ses idées et le développement de ses connaissances, surtout son intérêt pour la logique.

Conclusion :

- 1) A la publication de "La Création" ses connaissances sur la méthode hégélienne étaient très pauvres, comme il avait écrit lui-même.
- 2) Jusqu'à la publication de "La Philosophie" il approfondit ses connaissances sur Hegel, mais pour rivaliser avec Marx il évita consciemment de se rapprocher de Hegel.
- 3) Pour comprendre ses idées si extraordinairement contradictoires il faut attacher

de l'importance à son caractère.

4) Son idée permanente c'est la croyance à la mobilité, c'est-à-dire l'opposition à la croyance de l'absolu.

序 文

プルドン (Pierre-Joseph Proudhon) の名は今日でも正当に評価されているとは言えない。誰でもが直ちに思い出すのは 1840 年に書いた《財産とは何か, (Qu' est-ce que la propriété?)》の中でその冒頭にいきなり書いてある《財産とは何か, —それは盗みである。》と言う文句である。事実彼の名前が世に知られたのはこの書によってであり, しかもこの冒頭の文句の奇抜さによるものである。彼のように地位も無くまた特定の師を持たない人にとって世に出るためには普通では駄目なのでこのような思い切った表現を用いたものと思われる。一説によるとこの表現は大革命時代の思想家 Brissot の盗作とも言われるが, いずれにしてもこの書によって世に出るという彼の目的は達せられたが, 反面軽薄なパンフレット屋という世評を訂正するためにその後大いに苦しまねばならない立場に置かれた。

この書が相当の反響を生じたことは確かであるが, 中でもこの書はマルクスに高く評価された。このことが彼の生涯にひとつの契機となったわけで, 競争心の強い彼は常にマルクスを意識ししかも無関心をよそうという内面的ひとり芝居を演じなければならない運命に置かれた。マルクスとの敵対が決定的となったのは 1847 年の《経済的矛盾または貧困の哲学 (Contradictions économiques ou Philosophie de la misère)》の後であって, マルクスはこの書を猛烈に非難して《哲学の貧困》を書いたのは有名な事件である。

彼自身としてはもちろんそのようなパンフレット屋と見られることは心外であり, フーリエやブランキなどと同様に見られることも気に入らなかった。自尊心の強い彼としては常に最高の哲学者でありまた誰の真似でもないということを主張しようとしていた。

ここでは哲学者としての彼の論法を, 1843 年の《人類における秩序の創造 (Création de l'ordre dans l'humanité)》と 1853 年の《進歩の哲学 (Philosophie du Progrès)》の両書に述べられている思想体系, とくにその中のプルドン弁証法の成長の姿を考察したいと思う。

1. 性格の影 響

誰の場合でも多かれ少かれそうであろうが, プルドンの場合とくに, その個人的性格或いは好

悪が思想形成に強く影響している。そこでその性格のうちの特徴的ないくつかを考えることにする。

A) 自負心—劣等感

常に最高であるという自信、また最高でありたいという欲望は競争相手に対する異常なまでの意識となる。後述するように《弁証法》がヘーゲルの真似だと評されると次の著書では意識的にこの語を避け、またヘーゲルの名を一切出さないというようなやり方は彼のこの性格を物語るものである。同時にそうするためには常に新しい何物かをつくり出そうという意欲を必要とする。この競争心、向上心が彼の全生涯を通じて重要な支柱のひとつであった。ところで彼は殆んど自学である。奨学金を得て学校教育をうけたこともあるがその期間は長くない。また或特定の師を持ってもない。フーリエの思想に強く影響をうけたことは自らも認めている通りであるが、しかしフーリエ派から出たというわけではない。経済的理由にもよるが自意識の強い彼には学校や師が性に合わなかったのもあろう。

独力で自己をつくり上げたという自信が強い自負心となっていることは確かであるが、反面それは彼の劣等感の原因でもある。マルクスに指摘されるまでもなく《哲学》についての弱点は充分自覚したわけでそれが生涯マルクスへの劣等感となっていたに違いない。自負心と劣等感、この相反する性格は実はひとつのものの両面であって彼の場合とくにそういう傾向が強かったように思われる。

自分の出身についても同様である。自ら無産者と称してはいるが、そこに感ぜられるのはなんとなく貴族的な感覚、乃至は貴族へのあこがれのようなもので、この点ではヴォルテールと相通ずるものを持っている。例えば手帳のはじめに *Mémoires sur ma vie* が書いてあるがその中に前後と切り離された次のような文がある。《家系的貴族、——私は貴族である。(Ce que c'est que la noblesse de race.—— Je suis noble, moi!)》

もちろんこの1句の解釈はさまざまであろう。例えば *noble* は貴族という意味ではなく、高尚なという意味で、従って全体は《生まれつきの貴族がなんだ。——私は高尚だ。》という貴族への反発心とも考えられる。しかしその次に自分の先祖の評判記などを書いていることから考えると、一般人とは違う《選民》という意識は読みとれるので、恐らくは思想的には反貴族、プロレタリアであっても感覚的には一種の貴族趣味を持っていたものと思われる。

B) フランス人意識

フランス人たる彼がフランス人意識を持っていることは当然である。しかし徹底した無政府主義者で、自らもそう言っていた彼としては国民としての意識は余り強くない筈である。ことにマルクスと異り如何なる形でも国家は無用であると考え、革命の手段としての政治をも否定した彼

の場合フランス人意識が極めて強かったことは少々意外であるとも言えよう。

彼は1809年ブザンソン (Besançon) の生まれ、父は樽職人 **Claude-François Proudhon** である。ところでこの **Proudhon** という名について彼が手帳に書いているところによると次の通りである。

この名前はミラノ地方出身の **Prodoni** という移民が **Jura** 地方に居住、その子孫がプルドンとなったとも考えられる。しかし自分はこの説に賛成できない。まず、**Proud'hon Prud'hon Prud'homme, Preud'homme, Prudon, Prudont,** 等の名が **Jura** 山地及び **Franche-Comté** 地方、**Neuchâtel** 等に多いこと、**Prodoni** から **Proudhon** に変化するよりも逆の変化の方が言語学的に考えて普通であることのふたつがその理由である。従って **Prodoni** がフランスに来たのではなく、**Proudhon** の一族がミラノに行って **Prodoni** になったのであろう。

言語学者としても相当の自信を持っていたらしい彼の一面を物語ると共に、イタリア人の子孫ではないという意識の現われたものでもあろう。次に加えて「いづれにしろ私は純粋のジュラ石灰岩 (**calcaire Jurassique**) である」と書いている。

プルドンの民族意識のもうひとつはその激しいユダヤ人嫌いにあらわれている。1847年12月頃の手帳にユダヤ人について論文を書くことと記している。この論文は「マルクスへの返事」とともに公表する予定であったが掲載予定の「**le Peuple**」が発行されなかったために結局世に出なかった由で、従ってそのメモに依るほかない。

「すべてに毒を吹きこみ、いたる処にまぎれ込んでしかもいかなる民族とも融和しないこの民族……」と書き、「フランス女性と結婚した者を除きすべてのユダヤ人をフランスから追放すること、ユダヤ教会(**synagogues**)を廃止しその一切の使用を禁じ、最後にこのユダヤ教を禁止することを要求せよ。キリスト教徒が彼等を瀆神者と呼ぶのも当然である。ユダヤ人は人類の敵である。彼等をアジアに追放しまたは抹殺せよ。ハイネ、ウェイル、その他の者はスパイ、ロスチャイルド、クレミユウ、マルクス等は意地悪で短気で嫉妬深く辛辣で、彼等はわれわれを憎んでいる。鎖によるか溶合によるか或いは追放によるかいづれにせよユダヤ人は消えなければならない。中世の人達が本能的に憎んだものを私は反省によりそして決定的に憎む。」という激しい非難を加えている。宗教を否定する彼がキリスト教徒をひきあいに出すのもおかしな話であり、彼の思想と矛盾するもので、これは本能的な民族主義によるものとは考えられない。

もちろんマルクスに対する悪感情が大きく作用していることは明らかであり、彼にとってユダヤ人とマルクスとは同意語でさえあったといわれるけれども、それだけでないことは確かであろう。ユダヤ人ばかりでなく、英国人、ドイツ人、スラブ人等についても屢々悪感情を示している。反国家主義と民族優越意識、これもまた彼に内在したひとつの矛盾であろう。

C) 博学趣味

ヴォルテールやルソー等と同じく彼は極めて博学であった。少くとも博学であろうと大いに誇り、またそうであることを誇りともしていた。好んで新しい言葉を使い、古今の学者の名前を並べるのもその現われである。1837年には《一般文法論 (Essai sur la grammaire générale)》を出しており言語学とくに語源学には相当の自信を持っていたらしい。また手帳によると1830年頃にはヘブライ語を研究していた。1844年の手帳に出版計画が書いてあり、それによると、経済学、政治学、形而上学、論理学の本を次々に書く予定で或程度の準備もしていたらしい。このように広い興味と知識を持ち、常に新しいものを求めつくり出す反面、ひとたび発表した自説はなかなか改めない頑固さ、この矛盾した性格も逆説家プルドン形成する要素のひとつである。

2. l'Ordre における Série

a) l'Ordre 出版の意味

最初に述べたように《財産とは盗みである》と定義したことが彼の運命を決定したようなもので、彼としてはこの定義に哲学的説明を加えなければならないことになった。そこで人類社会の中において、歴史的にも論理的にも財産権がその存在理由を持たないことを証明しようというのが l'Ordre の目的であったと思われる。そこで彼は当時の最も新しい学説や思想を借りて自己流の理論を整えることになる。そこで最も彼に影響を与えた思想家は誰かということになると、従来それは主としてフーリエ、オーギュスト・コント (Anguste Comte) 及びヘーゲルであろうと言われている。

フーリエについては、1829年頃印刷屋で働いている時にその著書を印刷していたことは自らも書いているし、また非常に感激して読んだとも書いているところから疑いの余地がない。この書を構成する中心的方法は Série であるが、この série という語はフーリエの好んで用いた、と言うよりもその中心となった語であるから、プルドンがこの語と共に考え方も多分に借用したことは明らかである。コントについても、社会発展段階についての考え方も多分にその影響を受けたと想像される。コントの《実証哲学》(1830~42) は刊行されたばかりであるが、新しいものへの興味の強いプルドンであるから一応これを研究するだけの余裕はあったと考えていい。1845年4月頃の手帳に《宗教と哲学を否定したのは誰か。——私、コント、フォイエルバッハ》とあるからこの想像は正しいと思う。

最後にヘーゲルであるが、《弁証法 (dialectique)》、《体系系列 (dialectique sérielle)》等の用語といい、また後に述べるその論法といい、ヘーゲルの色彩は極めて濃厚であると言っている。ところが、l'Ordre の中に多くの哲学者、とくにカント、ライプニッツ等の名前が度々出て

来るのにヘーゲルの名は余り出て来ない。この疑問を解くためには当時のフランスでどの程度にヘーゲルが広く知られていたか、またヘーゲルを離れて《弁証法》そのものがどれ位一般的であったかを追及する必要があると思うが、今はそれをなし得ない。極めて大胆な想像であるが、ブルドンはこの時代ヘーゲルについてそれ程深く知らなかったのでわざわざその名を出さなかったのではないだろうか。

上記1845年4月頃の手帳の記録は一種の自己宣伝で、最初《*Mes titres à la postérité*》という題をつけ、後抹消してある由であるが、その全文は次の通りである。

財産を否定したのは誰か。——私、

公平（友愛）を正義以上のものとしたのは誰か。——私

Anarchie を宣言したのは誰か。——私

宗教及び哲学を否定したのは誰か。（既述）

Série をはじめて提示したのは誰か。——私

確実性の問題を解決したのは誰か。——私とヘーゲル。

経済学をつくり上げたのは誰か。——私

司法制度を人工的であるとして否定したのは誰か。——私

政治において、分割（*division*）のシステムを不分割（*indivision*）のシステムに対立させたのは誰か。——私

社会構造の一般的性格を方法論的に規定したのは誰か。——私

経済的矛盾の *Série* を示したのは誰か。——私

神の仮説をつくったのは誰か。——私

デモクラシー及び王制を破壊したのは誰か。——私

宗教、王制、財産の同一性を証明したのは誰か。——私

いかに手帳の中とはいえ、経済学の元祖とか、*Série* のように明らかにそうでないものまでごとく自分の功績にしてしまっている彼がコント、フォイエルバッハと共にヘーゲルの名を出しているのはやはり自分がヘーゲルに負う処多かったことを物語っているものと思う。

同じ年の10月1日の手帳に、*Burnouf* 氏の著書に対する *Littré* 氏の3論文という表題で書いたものの中に次の記述がある。

Thèse——無限の理性、非人間的神、自然、

Antithèse——進歩的理性、人間的人間、意思的自由

Synthèse——X（ヘーゲルの絶対、仏陀の無、ヒンズウのプラマ、中国人のタオ、*Cousin* の無限）

例によって列挙癖を見せているが、ヘーゲルについての或程度の関心と知識の存在を示すものと思う。ところが1848年1月にはさらにヘーゲルについての自信、と言うよりもヘーゲルを完全に消化したとの自信が現れている。《ヘーゲルの論理学以上にフランス的なものはない。ドイツのオリジナリティはすべてカント及びライプニッツの中にあり、フィフテ、シェリング及びヘーゲルはすべてドイツ的なものから離れてデカルト的方法論に近づいた》と言う。もちろん手帳の中に書いてあることではあり、彼の言おうとすることが何であるかを明確に知ることは困難であるが、ひとつにはヘーゲルの弁証法は大したことはないと書くことによって自分の偉大さを示したものであり、ついでにドイツ哲学を援用した時ヘーゲルの名を書かなかったことについての自己弁明を試みたのではあるまいか。

要するにヘーゲルについては、彼が多くの借用をしていることは判っても書中にその名前が出ていない点に関し真相が判らないのでその系譜的關係を断定することができない。

わたしは前述のように、l'Ordre の時代のプルドンについては事実余り知識がなく、間接的に弁証法を知ったのではないかと想像しているだけである。⁽¹⁾⁽²⁾

b) l'Ordre の構成

まずはじめにこの書で用いられる述語の定義を与えたのち、宗教、哲学、形而上学、経済学、歴史、機能の6章に分けて彼の弁証法を発展させる。その定義を要約すると次のようになる。

秩序 (ordre) とはすべての系列化された対称的 (symétrique) な排列である。秩序は必然的に分化 (division, distinction, différence) を予想する。従ってすべて未分化、無差別なものは秩序づけられたものとして把握することはできない。秩序は無生物では意識外の目に見えない不可知の法則によって保たれるが、合理的な生物にあっては、ある力によって維持され、生物はその力を知ろうと欲する。この力すなわち法則を知ることが知識である。知識を獲得するための手段としては宗教、哲学及び科学の3段階がある。そこでその段階の各々を考えなければならないが、まず宗教とは人間が文明初期において、自己と創造者との間に想定する関係である。誕生したばかりの社会は宗教を以て、宇宙 (univers) に関する自己の意思を表明する本能的象徴的直感的表現方法とする。それは感情 (sentiment) に基づくものであるから分析的証明、合理的確認と相容れないものである。不動な (immobile) 夢想的なものであるから非寛容で、研究的態度を許さないものである。

哲学は宗教的自然発生 (spontanéité) の次に現われるもので科学に向って動こうとする希望である。それは信仰 (foi) に対するアンチテーゼで、語義の示す如く科学を愛することを意味する。哲学の原理は因果関係の観念、その手段は Sophistique である。

宗教と哲学とはいずれも瞑想 (contemplation) によって研究し、すべて特殊性従って科学的

現実性を欠き *à priori* な原則が支配するという点で共通性を有する。しかし前者が自然発生的で本能的であるのに対し、後者は好奇心と反省との所産であるという点で異っている。

科学とは秩序の明白完全なそして確実で合理的な理解である。科学に特有な性格は、分化、個別性で、諸科学はそれぞれ疑惑を排し、仮説に頼らない創意 (*invention*) と証明方法を持つのが特徴である。宗教及び哲学との関係について言えば、科学は宗教的象徴の解明、哲学によって提起された問題の解決を任務とする。その広い分野の或る部分には現われたばかりのものもあり、また仕上げの段階のものもあるが完成されたものはない。しかしわれわれの理性を行使し地上におけるわれわれの任務を果たすのに役立つ。

科学がその第一歩をしるしていない処ではどこでも宗教または哲学すなわち無知と欺瞞とがある。

形而上学とは秩序に関する普遍的最高の理論で、その理論の個別的応用がそれぞれの科学に固有な方法となる。形而上学の目的は次の通りである

1. 方法論を欠いている諸分野の科学に方法論を与えること、すなわち宗教と哲学が呼び出した場所で科学をつくり上げること。
2. 真理の絶対的標準を示すこと。
3. 諸科学の共通目的について結論を与えること。すなわちこの世界の謎及び人類の運命について結論を与えること。

この3段階、宗教→哲学→形而上学という精神の科学への上昇過程が進歩である。秩序の発見にとっては多くの場合この進歩の観察が必要である。

宇宙のはじめはすべて同質の未分化な混沌 (*chaos*) であり分離分化が秩序の形である。

このように用語の定義を与えた後でそのひとつひとつを検討するわけであるが、彼の思想の基本は既に以上の定義の中に十分に読み取ることができる。それぞれの章で説くところ一種のペダントチックなおしゃべりに類するものである。

秩序を知るためには進歩の観察が必要であるが、その進歩を知る方法が彼の言う系列的弁証法 (*dialectique sériée*) である。 *série* という観念はもちろんフーリエから得たものである。従って彼の言う弁証法はなおフーリエの内容を持っている。一言にして言えば、異った観念をひとつの観点に導くこと、等しいまたは同一の概念をつくることを推論といい、推論、反省、比較の結果このようにしてつくられた系列が弁証法的系列であり、そのための方法が系列的弁証法である。従ってそこにはヘーゲルのような歴史的発展の観念は少い、最初の定義では段階的発展の必要を説いているが弁証法についての説明ではそういう考え方は見られない。弁証法の例としてあげてあるのはことごとく、類型化の例であって、異質の現象の中から共通の要素を抽出することに終

始している。

さすがに弁証法の項にはヘーゲルの名が出ているが、*Thèse, Antithèse, Synthèse* というヘーゲル弁証法を簡単に紹介し「ヘーゲルの *Création évolutive* は多くの観点の中からひとつだけをえがくことである」と述べ、さらに「ヘーゲルの体系は重大な批判をうけた」とも言い、結局ヘーゲルはひとつの特別な *série* の中にとじこもっていると言っている。

フーリエの *série* とヘーゲルの *dialectique* を結びつけた彼としてはフーリエは *dialectique* が不足し、ヘーゲルには *série* の観念が欠けていると批評して置けば簡単であったろう。ヘーゲルに対して *série* を振りかざそうとする意図が発展よりも類型化、連続の観念を重視する結果に陥らせたのではあるまいか。

フーリエについては、彼は次のように言う。「フーリエは *loi sérielle* を明らかにしたがその分類は不規則、形式は奇妙で、科学、芸術、産業の中に何も発見し得なかった。つまり *série* の創始者であるがその理論 (*théorie sérielle*) を知らなかった。」

弁証法的系列を構成する概念は殆んど常に論理的系列、すなわち多くの事実または未知の原理の代表的徴候 (*signes représentatifs*) であり、それを要約する表現はまたひとつの論理的系列であると言う。この点についての彼の書くところ極めて判りにくくまた整理されてもいない。例えば自由という概念について、言論の自由、労働の自由、良心の自由等いろいろな形で現われる多くの自由の中から共通の要素を抽出すればそれで自由というひとつのサインが得られるのでこういう推論で行けば誤りを犯すことは少い、というようなことを書いている。

三段論法においては哲学者は因果関係を重んじて、同質性の確認を行わないので第一義的決定の原因を説明すると主張しながら実はついに本質論の雲の中に迷い込むとも書いている。

この三段論法、本質論という用語は *Progès* ではさらに重要な意味を持たされることになる。

選択の理性に導かれた人間が自己の物質的条件を改良するためにつくる系列 (*série*) が経済学である。そして経済学のために材料を提供するのが歴史である。彼の歴史に対する考え方の本質は、歴史の科学性を否定することである。すなわち歴史は人智と人間社会とが純粋科学の状態に至り、その科学法則の実現をなすに至るまでに経過するさまざまな状態をひとつの継続として見たものであり、その単なる記述に過ぎない歴史の中から系列を発見するのが科学の任務であるということになる。

彼にとって最も重要なのはもちろん経済学である。系列とか弁証法とかをふりまわすのもそれによって自己の経済理論を科学的なものにしようとする道具に過ぎない。そしてその経済学の目的は、経済現象もまた動くものであり絶対的なものではないことを証明し、経済現象の基礎をなす財産もまたその例外ではないことを科学的に主張しようとするものである。「財産とは何

か?」でいくらか場当り的に出した題目を哲学者らしい装飾でつくりなおしたのが本書中の経済学であろうが、財産が盗みであるという立場の分析は当然に労働を分析することになる。当時のフランスには既にスミス経済学が入っておりその祖述者も多かったのでブルドンもスミス経済学については充分の知識を持っていたものと思われる。従って労働が経済学の主要問題であるという主張は珍らしくもなく、スミスからマルクスへの橋渡しの役割はいくらか認められるとしてもとくに取立てる程の新らしさはない。さて労働の研究手法として次のように4面からの分析を提案する。

1. 主観的な面, 労働者
2. 客観的な面, 生産のための材料
3. 総合的な面, 労働及び賃銀の配分
4. 歴史的な面, 科学的決定

そこで経済学は次の4分野にわけられる。

1. 有機的運動→労働配分
2. 産業的運動→価値の生産と流通, 信用の創造, 資本形成
3. 立法的運動→私有財産の責任管理への移向, 資本及び産業の集中
4. 科学的運動→徒弟制度組織, プロレタリアの廃止, 教育体系等

このような過程をへて経済学は発展するがそのための方法は次のようになる。

1. 目的を規定すること。
2. その観察すべき分野を明確にし主要な区分をすること。
3. 方法論を形成すること。

労働は人間の智力、体力の数量的表現であると考えられているが、またそれは神に至るひとつの系列と考えられる。労働を組織するということは人間の職分を規定し、序列、種類に従ってグループ分けすることで、生物学における分類と同じようなものである。

労働をこのように分類分析する目的は、このように労働を区分することによって、労働過程の各段階における等式関係を設定し、それによって搾取の可能性を否定することにあつたと思われるが、その点について明確な主張は見出し得ない。《賃銀は生産物と等しくなければならない》というような程度の文言はあるが正面から搾取の問題や資本蓄積の問題にはふれていないようである。

労働における責任を明らかにすることにより生産の中に正義(justice)を実現する。責任を明らかにすることは労働者が意識的に労働に参加することであるからそれは組合(association)の必然性を示し、連帯性がその中心となる。この書ではまだ明らかにされていないが、後年組合

主義を提唱した素地は既に存在しているしまた何よりも正義と平等を根本とした彼の思想がここにも見られるのである。

以上見たように大綱において当時の共産主義者（*communistes*）と同じ立場に立っているが、彼自身は共産主義者と同じだと考えてはいない。彼等は仮説を重視して人間には公的生活（*vie publique*）だけでなく私的生活（*vie privée*）もまた必要であることを忘れていたので、財産尊重主義者及び共産主義者というこの両単純派（*simplistes*）のいずれにもくみせず、新しい形を求める人々と協力すると称している。

3. Philosophie du Progrès

a. Progrès における論法

《進歩の哲学》は1853年に刊行されたが実際は1851年11月26日及び12月1日に *Sainte-Pélagie* 刑務所で書いた手紙に1853年前文をつけたものである。彼が出獄したのは1852年6月6日であるが入獄中に結婚したことから考えてもこの獄中生活はかなり自由なものであったろう。2通の手紙は *Romain Cornut* という批評家に答えるために《*Presse*》に発表する予定であったが12月2日のクーデタが起ったために公表できなかったと自ら書いているが、果して手紙そのまま *Progrès* に収めてあるかどうかは判らないということである。

しかし大綱はそのままであろうから1853年刊行ではあるが内容的には1851年、すなわちクーデタ以前のものと考えていいと思う。

Progrès においても根本的な立場は *l'Ordre* の場合と変わっていない。*l'Ordre* が主として社会を静態的にとらえ、運動を考える場合にもこれを一種の平面図としてえがいているのに対し動態的にとらえ、動きそのものを中心としているだけである。

l'Ordre と *Progrès* の間には多くの条件の変化があった。

政治的変化としては2月革命からその後の変動があり、経済的には産業革命の進行、さらには思想、哲学書の刊行あるいは翻訳出版があった。カントの《純粋理性批判》(1835) 《倫理学の形而上学》(1836) フーリエ全集 (1840—45) 等のほかコント、ルルウ (*Pierre Leroux*) 等の著書論文も出ているのでプルドンとしてはこれ等の人々の見解を参照しながらそれを越える自分を主張しなければならなかった。

第1の手紙に彼自身書いているように《学者も無学者もひとしく進歩ということを実用的物質的意味にとっている》つまりこの時代には工場生産が進展しつつあったから人々が進歩という言葉から受ける印象がそういう産業上の進歩であったとしてもそれは当然である。多くの発明、機械の増加、物質的及び倫理的富の増加等の具体的事実を進歩と考えるのが普通である。しかし

もちろんこれはプルドンの言う進歩とは異なるものである。そこでこの書の目的は進歩についての彼の見解をもう一度はっきりさせることであった。《進歩とは普遍的運動の確認であり、すべて不動の形式、永遠性の原理、不動性、無疵性を否定することである。絶対 (absolu) は反対に進歩の否定するものを肯定し、進歩の肯定するものを否定することである》

この時代の人々は誰でも絶対主義を排し、進歩を口にしたが問題はその理解の仕方にある。すべての人は絶対主義を嫌っているが、進歩を好まない人達はすべて絶対主義に加担していることになる」と書いているが、もちろんこの場合《進歩》とはプルドン流に考えたそれではなければならないので、彼にとっては進歩主義に反対されるよりもむしろ誤った進歩をとらえられる方が我慢できないことであった。

進歩とは思想の運動である。精神の本質は運動そのものであるから、真理すなわち現実とは自然の中でも文明社会においても本質的に歴史的であり、進歩、改変、変動及び変身 (métamorphose) をまぬがれない。固定的で永遠なものは運動の法則それ自体だけしかない。l'Ordre では série が論証法の中心をなしていた。ところが Progrès ではこの語は余り用いられない。例えば第1の手紙の第3章に《私が自然及び精神の本質を運動の中に求める結果、物ごとを推理し概念を整理するための技術としてはある種の変動、歴史またはどこかで私が名づけた Série が必要である》と書いている。l'Ordre の中であれ程教多く用いた自らその発明者を以て任じている Série という語をどこかで書いたと書いているのも彼らしい気取りの一種であろうが、この第1の手紙の最後の部分に《私は自分の著書を決して再読しない。従って私が最初に構成したものを忘れてしまった。しかしそんなことはどうでもいい。私が12年前にも前進しており、今も前進しているのだから》と書いている。

進歩変動を主張する彼は古い自書を忘れることも進歩のひとつであると考えていたのかも知れない。

デカルトは哲学の基礎として動かない《自己 (moi)》を見出し有名な《われ思うが故にわれあり》に達したが、《われ思う》ということ自体が運動を予想している。さらに《ある (être)》もまた運動以外の何物でもない。そこでこの命題は《われ動く、故にわれ成る (Je meus, donc je deviens. Moveor, ergo fio)》と言うべきであったと書いている。つまりデカルトの《ある》という言葉をも不動の根本と考えるのではなく、或る時或る条件の下における《状態》と考えるわけである。《われ》を中心にほかの物だけが動くのではなく、《われ》もまた動いている。従って《或るわれ》しかないということになる。

現実の問題に当てはめて考えると、社会においては毎日のようにさまざまな改革改良案が出されており、その中には正しい望ましいものもあるがそうでないものもある。それを見分けること

はむずかしいが、絶対性という意味を与えられたものはすべて間違っていると考えれば簡単に解決できる。私有財産権にしる共和制にしる、これが《絶対に》必要だと主張する者があればそれは間違っているということになる。

要するに *Progrès* においては *l'Ordre* で述べた運動に関する部分をその後の事情を加味しながらその意味を敷衍したもので、とくに物質的進歩と彼の言う進歩とが同一視されていることに對する抗議の意味を持つものであるから本質的には全く変化がないと思う。ただ *l'Ordre* で盛に用いた *série* は殆んど全く姿を消した。その代りに *groupe* という言葉をかなり多く使っているが、そのほかでは *syllogisme* もよく使っている。もちろん三段論法、因果律等は彼の賛成しないところであって三段論法を援用しているのも進歩理論の優越性を主張する場合の引き合いにされているのであるが彼が論理学の知識を深めたことがこの語を多く用いた理由のひとつではないかとも思われる。*l'Ordre* では物を分類する場合殆んど4分法を用いている。

もちろん論理上当然そうなったものもあるが中には無理してわざわざ4分したような場合も少くない。ところが *Progrès* では三段論法を否定しながらも3分法がかなり多い。別に関係はないのかも知れないが彼の論理学に関する自信がひとつの潜在意識となり、3という数字が多く出て来たと考えてもいいように思う。

b *l'Ordre* から *Progrès* への変遷過程

自分の著書を読みかえさないと称する彼であるが他人の批判については非常に敏感であったようであり、いやしくも自説を批判する者に対しては強い憎悪を抱く。例えばマルクスの《哲学の貧困》については手帳の中で《マルクスは社会主義のさなだ虫である》とか《経済的矛盾についていままでに批評した者はすべて最大の悪意嫉妬または愚劣さで満ちている。マルクス、モリナリ、……》と書いている。

l'Ordre については次のように書いている。読みかえたことのない自著について刊行後数年を経て手帳に書くというのも不思議なことであるが、公刊を予想しない手帳には比較的見栄が少いのであろう。

1847年11月の手帳に自分の著書についてのメモを書いている中のひとつで *l'Ordre* に関する部分は次の通りである。

象徴主義的科学 (*science symbolistique*) の空虚さ、法学の不充分さが証明された。財産制度の不法性が確証され開化的発展 (*développement civilisateur*) の意味が確認されまた社会的諸機能の等価性が確証された。社会体系 (*système social*) の知識について何もなされていない。

方法論、原理及び弁証法が欠けていた。

メモであるから終りの部分の意味は必ずしも自著の反省とは断定できない。或いは社会一般の

ことを言っているのかも知れないが、l'Ordre の欠点を認めたものと考えていいであろう。さらに続けて次のように言う。

新しい著作の中では私は自分の努力によって、すべての確実性の源、絶対的真理の発見及び精神構成法則に遡ることを試みた。諸哲学者の最新の著作に助けられて私は真理は孤立した、または単純な知覚の中には無く類似または同一の知覚の範囲 (cercle) または系列の中に存在することを示した。その範囲または系列というものは単位 (unité) という Synthèse の中に眠っている。すべて人間の知識は種類 (genres, espèces) 系列及び Synthèses をつくりまたは発見することから成立つこと、この法則は同時に主観的且客観的で自然にも精神にも本質的なものであること、すべての科学、美、真、完全に関するすべての観念はこの法則の上に立てられること、すべての誤りはこの法則をおかすことから生ずることなども示した。

《経済的矛盾》については別に書いているのでここにいる新しい著書が何を指すか明らかでない。Progrès にしては年代が少し合わないのでは或いは出版予定或いは計画だけで刊行はされなかったのかも知れないが内容的には Progrès にも連なるものであろう。

l'Ordre に弁証法が欠けていたという反省は恐らくヘーゲルについての理解を深めたことから生じたものであろうが、その結果のひとつは論理学への関心という形で現われた。

1847年5月の手帳に論理学について書いているものを要約すると次のようになる。

学校教育においては論理学を最初に教え続いて文法、修辞学、算術、幾何学、代数学、物理学、化学、地理学、博物及び歴史を教える。論理学と哲学の本質は諸科学の中において理性を正当に行行使することである。人類の歴史は哲学の歴史であり哲学の歴史は論理学の歴史である。すべて純粋思惟に属するものは論理学を前提とする。

専門家はしばしば自己の研究している専門について誰よりもゆがんだいびつな知識しか持たない。それに反して論理学によって考える訓練をした人の判断ほど自然で敏速で鋭いものはない。

フランスの諸学者や文学者が無能で無価値であるのは論理学を知らないからで、従ってすべての人は将来論理学を修めなければならない。

論理学は次の3部で構成される。

1. 純粋理論：諸科学における人間の精神に関する規則
2. 論理の中における人間精神の進歩の歴史
3. 応用：政治、宗教、倫理、民法、文学等における誤りと発見の選択、心理学

第3項の意味はよく判らないが、諸科学乃至社会現象の中から誤ったものと新発見に属する要素とを選び出すために論理学を応用すべきであるということであろう。

結 び

以上主として l'Ordre の中に展開されたプルドンの弁証法の大略を考察しそれが Progrès に至ってどのように変化したかを考えそしてその変化について彼の手帳を参照しながら若干の解釈を加えた。

自ら矛盾のかたまりと称する彼の思想を把握することは極めて困難である。また常に変化する彼の思想を考えるためにはさらにその後書かれた著書を検討して総合的に判断しなければならない。ここにはただ彼の弁証法についての考察の出発点を示しただけであり、今後さらに経済学、革命論、財産論を考察することによってその全体を明らかにしたいと思う。

なお著書は Marcel Rivière 版全集により、手帳は同じく Marcel Rivière から Centre National de la Recherche Scientifique の協力で1960年（第1巻）1961年（第2巻）に出版されたものに依った。手帳はなお続いて刊行される予定で、その刊行に依り新しい研究が可能となるであろう。

- 註 1. 1845年に彼は Bergmann に《私は決してヘーゲルを読んだことはない》と書いているという。ヘーゲルの《倫理学講義》は1840年から翻訳出版されているというから読む可能性はあったわけである。一方カントについては1840年《毎日読んでいる》との手紙を書いている。極端な表現を好む彼の言葉であるから無条件に信ずるわけにはいかないが或程度事実であろう。
2. 同じ時代のドイツの哲学者 Karl Grün とは面識もあり彼を通じて知識を得た点もあると思われる。しかしとくに親しかつたのは1845年頃であったと思われるからこの時代にはまだそれ程の影響を与えなかったであろう。